# H-5　ケチュア語アヤクーチョ方言の示差的格標示が示す対比性

東京大学言語学研究室 修士課程
諸隈夕子（stellestrellas@gmail.com）

## 1.　はじめに

ケチュア語アヤクーチョ方言(以下 AQ)とは、ペルー南部アヤクーチョ県を中心に使用されるケチュア語の一変種であり、Torero(1964)による下位分類ではケチュアⅡC に分類される。本稿で扱うアヤクーチョ方言を含むケチュア語は膠着的な統語形態法を持ち、格接尾辞をはじめとする豊富な接尾辞によって種々の文法的機能を実現する。

AQ では、名詞化接辞-sqa および-na[1]によって作られる従属節内(以下、名詞化節)においてのみ示差的格標示が起こり得る。具体的には、主語(主格)と直接目的語(対格[2])は主節においては一貫してそれぞれ-Ø(ゼロ)、-ta と標示されるが、名詞化節の中では主節と同形の標示に加えて主語には-pa(主節における属格と同形)、直接目的語には-Ø[3]という標示も見られる。ただし、名詞化節内で主語の-pa と直接目的語の-ta が共起することは無い。(このことから、AQ の示差的格標示においては主語の-pa、直接目的語の-ta がそれぞれ有標な標示であるとする。)

表 1　AQ における主語・直接目的語の標示

| | 主語 | 直接目的語 |
|---|---|---|
| 主節内 | -Ø | -ta |
| 名詞化節内 | -pa | -Ø |
| | -Ø | -Ø |
| | -Ø | -ta |

この示差的格標示について、生成文法の観点からその原因を分析した研究は存在する[4]ものの、意味上の違いについては管見の及ぶ限り明らかにされていない。そこで本稿では、まず AQ における事例を示差的格標示の通言語的分析に照らし合わせ、有標な標示(主語の-pa、直接目的語の-ta)の機能が(既存の分析には沿わないが)部分的には情報構造の観点から説明できることを示す。そして、情報構造のみでは説明できない「意外性」「特異性」を示す例については、情報構造で言われる「焦点(focus)」「対比(contrast)」の概念を拡張することによって、「対比の対象を想起させる」機能として包括的に説明できることを提示する。

なお、本稿で扱うデータは主にコンサルタントとの面談調査によって得られたものである。コンサルタントは 12 歳まで AQ モノリンガルの 40 代女性であり、学校教育によってスペイン語、日本への移住

---

[1] AQ で名詞化節を作る接尾辞には他に-y(不定詞を作る)と-q(関係節内における主語を修飾する関係節を作る)があるが、本稿では積極的には扱わない。また、前者は既実現、後者は未実現の内容を表すという意味の差異はあるが、示差的格標示においては同様の振る舞いをするものとして扱う。

[2] 対格接尾辞と呼ばれる-ta は、動詞の直接目的語の他に移動の到達点も示す。後者として用いられる場合は、名詞化節内の主語の-pa と共起可能である。

[3] 本稿では直接目的語に対するゼロ標示を ZO(Zero Objective)と呼ぶことにする。

[4] ただし AQ ではなく、AQ と非常に似た文法的特徴を持つとされるクスコ方言についての研究である。

に伴って日本語を習得している。

## 2. 示差的格標示の通言語的分析

示差的格標示が起こる要因については、大きく分けて対象の句が持つ意味特性(Aissen 2003 など)と、情報構造上の役割(Iemmolo 2010 など)の 2 つの観点から通言語的に分析が進んでいる。

### 2.1. 句の意味特性

Aissen(2003)は、「より強調[5]を置かれている直接目的語ほど明示的な格標示を受けやすい」とした上で、強調の度合いを測るものとして、有生性と特定性という 2 つの観点から(1)の階層を設けている。

(1) Animacy scale:

Human > Animate > Inanimate

Definiteness(Referentiality) scale:

Personal pronoun > Proper name > Definite NP > Indefinite specific NP > Non-specific NP

(Aissen, 2003)

この指標において、より上位の特徴を持つ(直接)目的語ほど格標示がされやすく、また、ある言語である特徴を持つ目的語が格標示される場合、それよりも上位の特徴を持つ目的語もまた格標示されるという傾向がある。また、主語に関しては目的語と対称的に、(1)でより右側の特徴を持つ要素ほど明示的な格標示を受けやすいと述べられている。

AQ の示差的格標示は、少なくとも有生性とは関係が無い。特定性についても、「有標な標示を受けた方が定であると解釈され、そうでない場合は不定と解釈される」という例は確かにある(ただし、-y による名詞化節内)ものの、固有名詞・個人名については-sqa、-na 共に有標・無標どちらの標示も受け得るため、Aissen の階層には当てはまらない。

### 2.2. 情報構造との関連

Iemmolo(2010)、Dalrymple and Nikolaeva(2011)では、主に目的語における示差的格標示は(少なくとも部分的には)主題性に起因し、有生・定・特定であることが主題に典型的な特徴であることから、2.1 で述べた有生性や特定性が情報構造とは関係無く示差的格標示を起こすように用法が拡張し得ると主張している。

AQ に関して言えば、主題というよりも焦点にあたる(主語または)直接目的語が有標な標示を受けることが多い。しかし、情報構造についての議論で用いられる主題・焦点・対比という概念について、特に焦点と対比についてはその定義の統一・共有が進んでいないことが指摘されている(Matic and Wedgwood 2013)。AQ の示差的格標示と情報構造、特に焦点性・対比性の関係を考察する前に、これらの概念を整理する。

#### 2.2.1. 焦点・対比・対比的主題

[5] 原文の‘prominence’の訳とする。

Krifka and Musan(2013)によれば、焦点(focus)は語の選択や発音・アクセントなど言語表現の表層的な部分にのみ作用する expression focus と、語が指す内容、意味に作用する denotation focus に分類される。denotation focus は、共通認識(common ground)の形成を統御する pragmatic use と、共通認識中の要素の真偽条件に関わる semantic use の二つの用法があり、それぞれの主な機能は(2)の通りである。

(2) pragmatic use: 文中でどの要素が一番重要かを示す、情報を訂正したり確証する、並行的な構造を強調する

semantic use: とりたて詞(additive and scalar particles)や否定詞、一部の連帯数量詞の作用域を定める

また、焦点は「焦点化された要素に対する対比の対象(alternatives)を想起させる」働きを持つものとされる。(Repp 2010)

対比(contrast)は焦点と同じく対比対象に関わる概念であり、主に並列構文(pallarel structure)や訂正(correction)、質問-回答の談話中に見られる。焦点と明確に区別する定義は未だなされていないが、焦点が「対比対象を想起させる」機能を持つ一方で、対比は「焦点と対比対象の間の関係を表す」機能を持つという点で異なっている。具体的には、焦点と対比(的焦点)の違いとして、対比の方が「対比対象が集合として閉じている[6](対比対象の大きさ)」「対比対象が明示されている(対比対象の明示性)」「焦点について述べられている事柄が、対比対象には当てはまらない(対比対象の除外性)」という特徴を典型的に持つとされる。一方、主題における対比性は、焦点における対比性と異なるとされる。対比的主題は並列構文と質問-回答の談話中において議論されてきたが、どちらの場合も除外性は持っていない。(Repp 2010)

本稿においては、まず焦点は Krifka and Musan(2013)のいう denotation focus を指すものとする。また、焦点は「(それの大きさ・明示性・除外性を問わず)対比対象を想起させる・含意する」という特性を持つものであるとして、この特性を「対比性」と呼ぶことにする。そして、「対比的主題」については、この意味での対比性を持つ主題のことを指すものとする。

2.2.2. AQ の示差的格標示と対比性

先に述べた対比性を用いると、AQ の示差的格標示のほとんどは対比性によって起きると説明できる。

まず、(3)(4)のように否定を含むような名詞化節においては、否定の焦点が有標な標示を受けるのが自然である。

(3) [Mana Raul-**pa** qillqa-Ø qu-sqa-n][7]-rayku
NEG Raul-**GEN** letter-ZO give-NMLZ.REAL-3SG-because
「[(他の人は送ったかもしれないが)ラウルが手紙をよこさなかったこと]のために……」

[6] 例えば'Only Bill turned up at the main station'について、「駅に来ることを話者が想定していた人のうち Bill のみが現れた」という場合に Bill は contrastive focus、「他の人とは関係無く Bill のみが現れた」という場合は単純に focus となる。
[7] 名詞化節の範囲を "[ ]" で示す。

(4) [Mana　Raul-Ø　qillqa-**ta**　qu-sqa-n]-rayku
NEG　Raul-NOM　letter-**ACC**　give-NMLZ.REAL-3SG-because
「[(他の物は送ったかもしれないが)ラウルが手紙をよこさなかったこと]のために……」

また、例えば「話し手は複数の人にそれぞれ異なる贈り物を贈ろうとしていて、その中でも特定の物(花)を贈る相手について言及する」、つまり、「ある特定の贈り物とその他の贈り物」の間に対比性が生まれる文脈では、(5)のように wayta-kuna「花」が有標な標示になるのが自然である。逆に、このような場合に ñuqa「私」が有標な標示になるのは不自然となる。

(5) [Ñuqa-Ø　wayta-kuna-**ta**　qu-na-y]　warmi-m
私-NOM　flower-PL-**ACC**　give-NMLZ.IR-1SG　woman-FOC
「[私が花を贈ろうとしている]女性」

主題についても、対比性を持つ主題は有標な標示が好まれる。(6)は、Maria を含む何人かが買い物に行ったという文脈で、その中で Maria を取り立てて言う例である。

(6) Maria-manta　rima-saq,　[pay-**pa**　papa-Ø　ranti-sqa-n-ta]
Maria-ABL　say-1SG.FUT　she-**GEN**　potato　buy-NMLZ.REAL-3SG-ACC

uyari-ru-ni.
hear-PAST-1SG
「マリアに関して言えば、[彼女はじゃがいもを買った]と聞いた」

同じ文脈で、(7)のように買い物に行った人を並列して直接対比するような場合も有標な標示が好まれる。なおこの場合、Maria か Rosa の片方のみに-pa を付けるのは容認されない。

(7) [Maria-**pa**　papa-Ø　ranti-sqa-n-ta],　[Rosa-**pa**　sara-Ø
Maria-**GEN**　potato-ZO　buy-NMLZ.REAL-3SG-ACC　Rosa-**GEN**　Corn-ZO

ranti-sqa-n-ta]　uyari-ru-ni.
buy-NMLZ.REAL-3SG-ACC　hear-PAST-1SG
「マリアはじゃがいもを買い、ロサはとうもろこしを買ったと聞いた」

以上の例は全て、有標な標示を受ける要素に対して(文脈的に関係する)対比対象が含意されたり((3)(4)(5)(6))、有標な標示を受ける要素が互いに対比対象となる(7)ため、対比性を持つと言える。しかし、このような「ある要素とそれと関連のある他の要素」の間の対比という観点からは説明できない例も存在する。

## 3.　意外性・特異性と示差的格標示

主語または直接目的語に対して他の事物が対比される場合だけではなく、「意外にも」「まさか」といった意味の「意外性」、また「特異性」を強調する際にも有標な標示が用いられる。

例えば、意外性を示す(8)(9)の例では、Juan や leon に対して特に対比される人や物が想起されるわけではない。

(8) [Juan-**pa** trucha-Ø miku-sqa-n]-ta uyari-ru-ni.
Juan-**GEN** trout-ZO eat-NMLZ.REAL-3SG-ACC hear-PAST-1SG
「[(魚が苦手なはずの)フアンがマスを食べた]と聞いた」

(9) [Juan-Ø leon-**ta** miku-sqa-n]-ta uyari-ru-ni.
Juan-NOM lion-**ACC** eat-NMLZ.REAL-3SG-ACC hear-PAST-1SG
「[フアンが(まさかの)ライオンを食べた]と聞いた」

上の例では、「フアンは魚を食べない」「人はライオンを食べない」という話し手の予想に反する内容が述べられており、フアンやライオンが強調の対象になる。「ある要素とそれ以外の事物」の対比に限らず、「ある要素の実際の状態」に対する「話者が予想していた状態」も対比対象として想起されうるとすれば、このような「意外性」もまた対比性の 1 つと言える。

(10)(11)は、名詞化節の内容を際立たせるのに十分な「特異性」を持つと考えられる要素に有標な標示がされる例である。

(10) a. kay-qa [achka runa-kuna-**pa** puri-sqa-n] ñan-mi.
this-TOP many man-PL-**GEN** walk-NMLZ.REAL-3SG road-FOC

b. kay-qa [achka runa-kuna-Ø puri-sqa-n] ñan-mi.
this-TOP many man-PL-NOM walk-NMLZ.REAL-3SG road-FOC
「これは[たくさんの人々が通った]道だ」

(11) a. ?kay-qa [runa-kuna-pa puri-sqa-n] ñan-mi.
this-TOP man-PL-GEN walk-NMLZ.REAL-3SG road-FOC

b. kay-qa [runa-kuna-Ø puri-sqa-n] ñan-mi.
this-TOP man-PL-NOM walk-NMLZ.REAL-3SG road-FOC
「これは[人々が通った]道だ」

(10)(11)のどちらも、主語(runa-kuna)への標示が無標な場合に容認度の差は無いが、(11)は(10)に比べて容認度が下がる。(10)の「たくさんの人々」は(例えば「獣」のような)他の事物と対比されているわけではないが、「人の多さ」という性質において特異性があり、単なる「人々」が対比対象として想起されている。一方(11)の「人々」はそのような特異性を持たないため、有標な標示が容認されにくいと考えられる。

4.　考察と展望

以上の例から、AQ の示差的格標示の機能は、「有標な標示がなされる要素に関して、『関連する事物・話者が予想していた状態・特異性が無い状態』を対比対象として想起させる」という、情報構造で言う「対比」に比べてより広範な「対比性」を示すことと言える。

この示差的格標示が名詞化節内のみで起きるのには、主節において焦点を示す-m[8]、-s[8]、-chu[9]や対比を示す(と言われる)-taq は名詞化節内では用いることができないため、これらの代わりとして示差的格標示が起きているという理由が考えられる。ただし、先に上げた他にも焦点性を持つであろう「とりたて」の機能を持つ接尾辞[10]があり、こうした接尾辞も全て名詞化節内では現れないのか、もし現れるものがあるとすれば示差的格標示とどう関係するのかという点を更に検証する必要がある。

また、別のコンサルタント(本稿で扱ったデータ提供者の親族である 20 代男性)に本稿で扱ったものとは異なる例文と合わせて面談調査を行ったところ、対比性の有無を問わず有標な標示が不適格とされる例も見られた。これが世代差によるものか、そうならばどういう差が生まれているかについても調査の余地がある。

略号

ACC:対格 ABL:奪格 FOC:焦点 FUT:未来 GEN:属格 IR:未実現 NEG:否定 NOM:主格
NMLZ:名詞化 PAST:過去 PL:複数 REAL:既実現 TOP:主題 ZO:直接目的語(無標)

参考文献

Aissen, Judith. 2003. “Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy.” *Natural Language & Linguistic Theory* 21 (3): 435–83.

Dalrymple, Mary., and Irina A. Nikolaeva. 2011. *Objects and Information Structure*. *Cambridge Studies in Linguistics 131*. Cambridge : Cambridge University Press.

Iemmolo, Giorgio. 2010. “Topicality and Differential Object Marking. Evidence from Romance and Beyond.” *Studies in Language* 34 (2): 239–72.

Krifka, Manfred, and Renate Musan. 2013. *The Expression of Information Structure*. Berlin : De Gruyter Mouton.

Matic, Dejan, and Daniel Wedgwood. 2013. “The Meanings of Focus: The Significance of an Interpretation-Based Category in Cross-Linguistic Analysis.” *Journal of Linguistics* 49 (01): 127–63.

Repp, Sophie. 2010. “Defining ‘Contrast’ as an Information-Structural Notion in Grammar.” *Lingua* 120 (6): 1333–45.

Torero, Fernández de Córdova, Alfredo A. 1964. “Los Dialectos Quechuas.” *Anales Científicos de La Universidad Agraria* 2: 446–478.

[8] この 2 つは証拠性を示す機能も持ち、前者は一次情報、後者は伝聞を示す。
[9] 否定と疑問の焦点を示す。
[10] 添加「～も」の-pas や限定「～だけ」の-lla など。